

たまいたま

川柳



ツバメの子

平成30年(2018年)
6月号 (No.703)

日川協加盟

巻頭言

祈りと運といふこと

願法みつる

ところが豊かになったのだから。老若を問わず、古寺名刹や各種仏像への来観が賑わっている。

古来、寺院仏閣や仏像は、権力者が建立したものであった。彼らのみが、国家や一族そして自己の安寧や武運長久を、祈願する資格を保有していたからである。そして時代とともに、権力は武家層に移り、庶民にも浸透してきたのが、祈りの歴史であったと思う。

一方、神社は、遙か神話の時代から、規模の大小を問わず存在してきた。社殿の奥に、目には見えない神が在っていると信じて、ナニヤラを念じている。

神仏混淆の時代から、日本人は人智を超えたチカラを感じ取ってきた。そして現代人は、彼我の仏教的な世界をうすうす肌で感じながらも、一方では馬頭観音に競馬の的中を、狐や狸には祈願成就や繁栄を託し、手を合わせている。彼らは合理的だから、祈りの結果については、運があったとか無かったとか、意外に淡泊である。口惜しい思いをしても、神や仏の所為にはしない。

川柳大会で柳人は、祈ることはなかるう。だが自信作が没になったり、当て馬の句が抜けるなど、微苦笑の場面は多い。こんな下キ、運を感じる。たるう。その運は、神と仏のどちらだろう。

日日是好

願法みつる

咳払いして通夜の僧切ながら

経文が無理な注文ばかりつけ

善人は自分の善を意識せず

福田案山子氏追悼

独座する案山子氏や逝く千里眼

積善を語り合ってる蓮の台